

書評

『外邦図—帝国日本のアジア地図』

小林 茂, 中央公論新社 (中公新書), 2011年, 282p.

高槻 幸枝

「明治期から第二次世界大戦終結まで、日本がアジア太平洋地域について作製した地図を『外邦図』と呼ぶ」。本書はこのような書き出しで始まる。これらの地図は、そもそも部外秘の軍事情報であったこと、終戦時に多くが焼却処分とされたこと、焼却を免れた地図も一部の関係者だけに存在が知られているという状況であったことから、近年までその作製の経緯や全容は謎に包まれたままであった。

この外邦図の近代資料としての価値に注目し、研究を開始したのが著者を中心とするグループであり、本書は10年以上にわたり外邦図研究を進めてきた著者が、軍事情報として誕生した外邦図の歴史と、可能性を秘めた近代資料としての再生の試みについて、一般読者向けにまとめたものである。

地図の作製、特に近代国家における地図の作製には、国内外の政治の動きが関わってくる。外邦図の多くが戦時下で作製されたこともあり、その歴史を論じるにあたっては、日本と周辺諸国との外交関係や戦況の推移、それにとまなう地図作製組織の再編成や測量方法の変化、また近代的な税制の導入のための土地調査事業をはじめとする植民地統治との関係など、さまざまな観点からの検討が必要になる。また、当然のことながら、測量、製図、印刷の技術の進展も地図作製に影響を与える要因であり、それらの歴史も視野に入れなくてはならない。

ページ数が限られている新書の形式で、このようないろいろな要求に答えようとしたためか、本書は、序章と終章を含めると全15章となり、さらに各章の中身も細かく節に分けられている。一見煩雑なようであるが、これらの章と節には内容を示す具体的なタイトルがつけられているので、目次を眺めるだけでも大まかな流れを知ることができる。

著者の小林茂氏は、大阪大学文学研究科教授（人文地理学）、放送大学客員教授である。本書の序章によれば、氏が外邦図研究に取り組むことになったきっかけは、故浅井辰郎お茶の水女子大学元教授を通じ、同校所蔵の外邦図の存在を知ったことであったという。戦前の地理的状況を示す貴重な学術資料が、大量に埋もれていることに驚いた小林氏は、研究資金を得て本格的な調査・研究を開始する。

本書は、著者と外邦図の出会い、研究を開始した経緯、さらに外邦図の定義と特長が述べられる、「はしがき」ならびに序章から始まる。第1章から第13章では、概ね時系列に沿って外邦図の歴史が紹介される。著者が示している4つの時期に分けるなら、第1章と第2章が、「外国製地図からの編集図の作製」の時期（以下、第1期とする）、第3章から第5章が「少数の将校による探検的な測量と地図作製」の時期（第2期）、第6章から第10章が「大人数の測量技術者による臨時測図部の活動」の時期（第3期）、第11章から第13章の前半が「空中写真測量と外国製地図の複製図作製」の時期（第4期）となる。さらに第13章後半では、敗戦による作製終了後の外邦図の処分および、外邦図の一部を複数の大学で所蔵するに至る経緯が説明され、終章と「おわりに」では、外邦図を近代資料として広く利用するための環境整備と、将来の展望が述べられる。

第1期についての章では、まず、外邦図以前の日本の近世的な地図作製システムと、西欧のそれとが比較される。地図作製の近代性について考える場合、技術的な面にのみ目が行きがちであるが、常設の国家機関が実施し成果が社会還元される近代的なシステムと、伊能忠敬の測量を比べ、臨時組織による測量で成果が非公開である点でも近世的とする、「組織」と「成果の利用」への言及は興味深い。

初期の外邦図として紹介される欧米製海図と現地の既存地図による編集図にも、とにかく近隣諸国の情報を集めねば、という切迫感が感じられ、国家および政治と地図の関係を改めて意識させられる。また、これ以降、しばしば登場する平板測量、三角測量、空中写

真測量などの測量技術については「コラム」の形式で解説がなされ、理解の助けとなっている。

第2期についての章では、外交使節団に同行するなどして、朝鮮半島や中国大陸で偵察や測量をおこなった陸軍将校たちの活動が取り上げられる。これらの旅行に関しては、『東京地学協会報告』に報告記事が掲載されることもあったそうで、その引用や、将校たちに渡された心得などの文書から明らかになる具体的な活動内容には興味をひかれた。1879年に、後年首相となる桂太郎中佐によって作成された「清国派出将校心得」（『参謀本部歴史草案』）では、「図誌に記し、或は看取図を製し、以て将来の用に供す可し」とあり、地図作製が義務づけられていたという。それら将校たちによる手描き原図は、最終的に1/200,000地図に編集され、日清戦争（1894年開戦）でも利用されることになる。

第3期についての章では、日清、日露の戦時中に、編成された臨時測図部の活動、終戦後の秘密測量の開始に関して述べられる。秘密測量では、距離や方位を計測せずに目測で地図を描く方法もとられており、本書には謄写版によるこれらの印刷図も示されている。戦時には無法状態に乗じて臨時測図部によっておおっぴらに、そして平時には隠れて測量をおこなうことは、この後も繰り返されたという。さらに、戦場での敵国作製地図の争奪、地図の利用実態が、当時の将校の日記や回想をひいて紹介される。

また、台湾、朝鮮、関東州などの植民地においては、土地調査事業の実施にあわせ、地籍図と地形図をまとめて整備することが計画された。これに先立ち、地域の実情や作業期間の制限に沿って、三角点網が整備され、三角測量がおこなわれる（台湾では1900年に三角測量開始、朝鮮では1910年、関東州では1914年）。さらに、現地での技術員養成のための養成所設置や、清国からの陸地測量部修技所への留学受け入れなどのかたちで進められた、各国への技術移転についても述べられる。

1914年の山東半島の青島占領時、1918年からのシベリア出兵時にも、戦地での測量が実施され、作戦用、

軍政用、戦史用などの地図作製、さらにドイツ製地図やロシア製地図の接收、利用がなされる。

情勢の変化にあわせ、測量方法や組織を変化させながら地図作製範囲の拡大を図っていく様子が、ここでも具体的な資料をもとに紹介されている。

第4期についての章では、空中写真測量の導入により、短期間に精度の高い地図が作製できるようになるまでの経緯、地図作製の実態が、1927年に始まる山東出兵での測量班の活動などにより紹介される。空中写真は、広大な地域について迅速に正確な地図を提供できることから、樺太における森林資源調査にも利用された。そして満洲における軍事的・行政的需要の増大をきっかけとして、写真撮影の満洲航空株式会社（満洲国、関東軍、満鉄、住友合資会社による国策会社。1933年より本格的に写真撮影に関与）への移管がなされる。

また、1931年の満洲事変で、大量の中国製地図を押収したのをはじめとして、その後も、オランダ領東印度、マレー半島、シンガポールなどで、外国製地図が大量に接收されるようになる。これらの地図は、多数の人手を動員して複製が進められたという。さらにここでは、第二次世界大戦期の外邦図作製範囲の拡大と、大戦末期の南方における測量部隊の活動が、当時の回想などから紹介される。

そして1945年の敗戦にともない、外邦図の作製は終了し、その多くは焼却処分される。ここまでが外邦図作製以前の幕末から作製終了にいたる、現役の軍事情報としての外邦図の歴史である。

さらに第13章の後半と終章では、焼却を免れた外邦図の行方、それらの活用に関する将来展望が述べられる。現在、複数の大学で所蔵されている外邦図は、終戦直前に「兵要地理調査研究会」を組織した大本営参謀の渡辺正氏と、研究会に参加した地理学者とのつながりから、終戦直後に大本営参謀本部から持ち出されたものであるという。この持ち出しには大きく二つのルートがあり、一方が東北大学へ、もう一方が最終的に、文部省の研究所であった資源科学研究所へ運ばれる。後者の外邦図が、当初、研究所所員であった浅井

辰郎氏の赴任にともないお茶の水女子大学へ移動、現在の外邦図コレクションとなった。研究所の外邦図は、浅井氏により1953年頃から整理が始められ、重複分を分けて複数のセットに分類されており、もっとも充実したセットがお茶の水女子大学に、そして残りのセットが京都大学、東京大学、立教大学、広島大学、大阪大学などに分配されたそうである。

しかしながらその後、外邦図の多くは利用されることなく半世紀近くの間、本稿冒頭で述べたように、一部の関係者のみが知る存在であり続けることとなる。ここには「戦争と植民地支配の産物であるものには、できるだけ触れたくない」という意識が働いていたものと著者は述べる。

そして、外邦図を戦争と植民地支配の産物と認めつつ、その活用を目指すという共通理解が広がり、本格的な目録の整備が進むのが、2000年代はじめである。著者らによる共同研究の中で、外邦図を大量に保管している大学の所蔵目録が作成され、2003年の東北大学、2005年の京都大学に続き、2007年にはお茶の水女子大学の所蔵目録も完成した。さらに外邦図の劣化を防ぎ、検索・閲覧を容易にするため、外邦図の画像データと書誌データをあわせて、デジタルアーカイブとしてweb公開するという取り組みも進められている。

国内各所、さらには終戦時に接収されアメリカ議会図書館など国外で保存されている外邦図にも目を配った本格的な研究プロジェクトは、著者らによるものが初めてであろう。このプロジェクトに関する書籍として2009年に著者編による『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』(大阪大学出版会)が発行されている

が、本書は初の一般読者向けの外邦図入門書といえる。ここまでみてきたように、外邦図自体の歴史もちろん興味深いのが、著者が外邦図に出会い、研究会を組織して研究費を獲得し、基本データの整備をおこないつつ(目録作製)、対象の歴史を精査し(関係者を招いての研究会開催、関係資料の探索と検討)、応用研究にも着手して、さらに社会への還元(地図データをwebで公開。イギリスや台湾の事例を調査し連携を模索)を開始する…というように外邦図研究が広がってゆくさまも、大変にエキサイティングであった。本書をきっかけに、多くの人が外邦図に興味を持ってくれること、そしていろいろな分野から外邦図研究への参入があることを期待したい。

参考

- 小林茂編 2009.『近代日本の地図作製とアジア太平洋地域』大阪大学出版会。
お茶の水女子大学外邦図コレクション. <http://www.lib.ocha.ac.jp/digital.html> (最終閲覧日:2011年12月7日).
外邦図デジタルアーカイブ(東北大学). <http://dbs.library.tohoku.ac.jp/gaihouzu/> (最終閲覧日:2011年12月7日).
外邦図研究プロジェクト(大阪大学). <http://www.let.osaka-u.ac.jp/geography/gaihouzu/> (最終閲覧日:2011年12月7日).

たかつき・ゆきえ(2010年博士課程修了)
群馬大学・東京成徳大学 非常勤講師